

学習困難な中国帰国者の日本語をはじめとする生活ニーズ

安場 淳

0. はじめに

日本に定住する外国人は、国際結婚や就労、留学を経ての就職、中国帰国者^{*1}(以下、帰国者)、難民など、実に様々な背景を携えてここ10数年で急増した。地域社会においても、彼らいわゆるニューカマーの定住外国人を対等な住民として受け入れる「異文化との共生」の動きが公私を問わず徐々に広がってきた。この動きは、定住者は対等な住民として、日本語や日本の生活習慣に通じていようがまいが尊重されるべきであるという考えが市民権を得つつあるのと軌を一にしているだろう。

もちろん、だからといって日本語学習の機会を保障する必要がなくなるということはない。定住者として日本で十全な社会生活を送るためには、ある程度の日本語でのコミュニケーション力はやはり必要である。しかし、留学生と異なり、生活しながら学ぶ定住者の場合、学習活動を行うのは容易ではない。生活の現場は日本語に接する機会ではあるが、彼らにはそこで日本語をゆっくり学んでいる時間的・精神的な余裕がないのである。国際日本語普及協会(1994、1997 a, b)などにも、定住外国人が直面するこれらの困難について報告されている。

ところで、定住者の中には学習適性や母語の識字力の関係で、学習活動を行うことが容易でない人たちがいる。母語での公的な教育の機会をほとんど得られなかった非識字者^{*2}・半非識字者と呼ばれる人たちや、初等程度の教育機会は得られても、自己の学習適性や環境に即した教育が受けられなかったために自分に合った学習方法を身につけられなかった

人たちである(以下、これらの人たちを学習困難者と呼ぶ)。中国の教育事情^{*1}を反映して、帰国者には学習困難者が多い。帰国者人口の1/5~1/4が学習困難者で占められる^{*2}。

日本語習得に関して帰国者の学習困難者に最も近い立場にあるのは、現在70~80歳代の在日韓国・朝鮮人一世の女性だろう。母国で学校に行かせてもらえなかったために母語の読み書きができない人が多い。彼女らは10代後半から20代で来日しているので、帰国者二世青年の学習困難者が彼女らの60年前の姿に近いと言える。「母語の読み書きがほとんどできないことは、その後の日本語の習得に大きく影響し」、彼女たち自身も『私らの日本語は道端で拾った言葉だから、きちんとは話せない』と語っている(川崎市、1997)。

とはいえ、彼女たちの場合、若さが生活の中での日本語習得を助け、とにもかくにも日常生活を送るに足る日本語は習得されている。これに対して、残留孤児世代は帰国の時点ですでに40~50代、それでも肉体的にも精神的にも新しい事柄を吸収する力の衰える年代である。未知の環境での、まったくゼロからの日本語学習は困難を極める。

帰国者に対しては公的な日本語教育の機会が提供されている。しかし、帰国者のための日本語教室や自立研修センター^{*3}に学習困難者のためだけのクラスを設ける余裕はない。結果、学習機会が得られたとしても、進度のはるかに速い他の学習者に交じって学ぶ教室の中で、自己効力感を持たずに埋もれていくことになる。日常生活の中にも、彼らに合ったペ

*1日中国交回復後に帰国した中国残留邦人とその同伴および後に呼び寄せた家族の総称として用いる。

*2ユネスコ『教育統計の国際的標準化に関する勧告』の定義「読み書きができず、日常生活に関係ある事実についての短い簡単な文章も理解できない者」による。

*11995年の中国政府統計では、就学率は小学校98.5%、中学校78.4%であるが、中途退学する児童生徒が農村部では依然として多い。また、非識字者人口は約1.5億人とされている(中国年鑑、1997)。また、1960-70年代の文化大革命期は学校教育がその機能を果たしておらず、この時期に小中学生だった人の中には学歴はあっても識字力の低い人が多い。

*2所沢の中国帰国者定着促進センター入所生に対する識字力テストのデータに基づく。

*3国費で帰国・来日した帰国者が定着促進センターでの4ヶ月の日本語・日本事情の研修後、各定住地にて研修を続けて受ける機関。全国に20カ所ある。

ースでの自然な習得を促進する環境はないことが多い。

このため、いつまでもサバイバルレベルの日本語から脱することができない人が多くなる。また、読み書きができないことから、様々な手続きも家族(主に二世)や自立指導員などの公的支援者に頼らざるを得ない。自動販売機で切符を買うといった日常生活に必要な技能・知識も習得されにくい。病院への付き添いから買い物まで二世に頼っているケースもあった(児玉他、1995)。中には、非識字者ではあるが自分なりの学習方法を持ち、また日本での言語環境にも恵まれて、日常会話に支障がないほどの日本語を習得し得たケースもあるが、ごく稀である。

しかし、長く続く日本での生活の質(QOL)を高めるために、学習を生活の中に位置づけることは、学習困難者といえども可能なはずである。帰国者の学習支援に携わる筆者らは、何か手伝えることはないか、と模索してきており、今回、彼らのニーズを把握すべく調査を行った。本稿ではその結果を報告したい^{*1}。学習困難者に限らず、ニューカマー全般にとって、QOLを高めるための生活の中の学習支援は今後ますます必要になっていこう。集団で帰国するようになってすでに十数年を経ている帰国者のケースは、ニューカマー全般の学習ニーズを把握する上でも益するところがあると考ええる。

1. 調査の目的、対象と方法

本調査の目的は、定住している帰国者の中の学習困難者が持つ学習ニーズを、できるだけこの人たちの生きる世界に即して、実際の支援につながるような具体性をもって把握することにある。したがって、今回は彼らの周囲の自立指導員^{*2}などの支援者側の声を聞くことに重点を置かな

*1 識字者を対象とする質問紙調査の結果については安場他(1997)を参照されたい。

*2 帰国者援護施策の一つで、帰国・来日後の三年間は一世帯に一人、都道府県の委託を受けた自立指導員が生活上の様々な支援に当たるもの。

かった。^{*1}

調査対象は所沢の中国帰国者定着促進センター(以下、所沢センター)の出身で、日本に定住して2~12年の帰国者のうちの学習困難者である(表1)。居住地域が偏らないように考慮し、東北、首都圏各2世帯、関東、近畿、九州各1世帯とした。学習困難者であるとの診断は、中国での学歴、所沢センターの中国語識字力テストの結果および当センターでの研修中の観察によった。実際の対象者は40-50代の世代が10人、20-30代の二世世代が4人となった。

調査方法を考えるにあたっては、次のことを考慮した。

(半)非識字者を多く含む対象であり、また質問紙調査に不慣れなこともあって文字を媒介とする質問紙調査は行えない。また、「学習困難者の生きる世界に即して」という調査の目的から、質的な調査方法をとった。ただし、年齢、滞日期間については母集団内の比率を考慮した。

学習困難者の多くは、学校教育の機会がなかったり、機会があってもそこで自己効力感を得る体験がなかったりしたため、「教育」や「学習」に対して否定的な態度を持っている。また、日本での経験を通して日本語の習得に対しても諦めてしまっている可能性が高く、学習ニーズが深く潜在化していて把握することが容易ではないと予想される。

そこで、調査者は自発的にニーズが表出されるのを待つのではなく、掘り起こしを行うことにした。つまり、こんなことで困っていないか、こんな日本語は必要でないか、と対象者に問いかけるのである。ただし、この方法だと調査者の恣意的な枠組みに対象者をはめこんでしまう危険がある。そこで、まず調査者が設定したニーズ領域等の枠組み(表1、安場他(1997)参照)の中でニーズの有無を尋ねはするが、その過程では対象者の思考の流れを妨げないようにするものとした。

*1この点で、結果の解釈が一面的であるとの批判に本稿は耐えない。

表1 調査項目

- 生活の状況
- a 社会生活...外出の頻度、外出しての行動、職業/身分
 - b 生活全般への満足度および不満に感じている領域
 - c 情報の入手状況...情報提供元、入手困難な領域
 - d 日本人との交際状況...家庭外での言語の使用頻度と相手、「親しい日本人」の有無
 - e 家庭の状況...家族との同居状況、使用言語、家庭内での行動
- 学習ニーズに関する項目
- a 日本語レディネス...会話と読み書きについての困難度、日本語能力の自己評価
 - b 日本語学習ニーズ...技能/場面/要素別
 - c 日本語以外の知識に関する学習ニーズ...職業上の専門知識、日本の生活習慣、母語の保持など
 - d 学習条件...希望する学習形態
 - e 学習環境...現在学習を阻害している要因、通信媒体機器の所有状況
 - f 日本での学習歴...公的私的な日本語学習歴、学歴、職訓校での学習歴と分野
- 日本社会に対する要望

また、対象者の回答や、それから引き出される、よりつつこんだ調査者の問いの順序や内容も、この枠に沿う必要はない。そして、最終的に前述の枠組みに基づく項目がなるべくすべて提示されていることを目指すという折衷的な方法をとった。さらに、調査者の設定した枠に収まらない回答が、調査に対して重要な示唆となる可能性がある。調査者は回答に付随するそうした「つぶやき」のようなものを、極力掬い上げるよう努めるものとする。

また、調査は自宅を訪問して行い、住環境を含む対象者の生活環境およびその環境の中での対象者の行動も含めて、参与観察的に把握しようとするものとした。調査者は2人1組で赴き、調査結果について確認しあうことで、1人だけの観察による判断の主観性を回避しようとした。媒介言語は原則として中国語を用いた。調査者のうち少なくとも1名は、その対象者の元のクラス担任など、ラポールのすでに形成されている者とした。また、1名は中国語をあまり解さない者とし、その場での日本

語でのコミュニケーションを試みることで日本語力もある程度評価できるようにした。以上の調査の方法については、信頼性を保つべく、検討・準備を重ねてきた調査チーム内でマニュアル化し、確認しあった。

2. 調査結果と考察

表1は対象者の家族別の属性と年齢である。表中の「ツ」は妻、「才」は夫を表す。

表1 対象者の家族別の属性と調査時年齢

世帯	A家	B家	C家	D家	E家	F家	G家	計
孤児本人	Aツ、54	B才、53	Cツ、61	Dツ、54	/ /	F才、53	G才、53	6人
配偶者	/ /	B才、58	/ /	D才、58	/ /	Fツ、44	Gツ、49	4人
二世	A1、31	/ /	C1、36	/ /	E1、20	/ /	/ /	4人
二世	/ /	/ /	C2、28	/ /		/ /	/ /	

凡例...Cツ: C家の妻、B才: B家の夫、C1、C2: それぞれCの子であることを表す。なお、E家は孤児本人、配偶者ともに学習困難者であるが、時間の関係で二世にしか面接できなかった。

二世のうち、A1とE1以外は既婚で子供がいる。

調査の結果、40-50代の一世世代と20-30代の二世世代とでは対象者数および問題の性質がかなり異なることが示唆されたため、この二つは分けて報告することとした。

2-1.40-50代の一世世代の調査結果(敬称略)

表2 対象者の中国での学歴、現在の職業(一世世代)

	Aツ	Bツ	B才	Cツ	Dツ	D才	F才	Fツ	G才	Gツ
学歴	なし	小4修	小6卒	なし	なし	なし	なし	なし	小3退	小1退
職業	無職	無職	無職	パート無職	食品加工工場	清掃無職	清掃	清掃	塗装工	洗い場

2-1-1.生活の満足度

生活全般に関する満足度の10人の平均値は、5段階で3.78であった。件数が少ないのと調査方法が異なるのとで単純に比較することはできないが、修了生の平均値3.49(安場他、1997)と比べると高めである。修了生の場合、滞日年数が多いほど満足度は高い傾向があるが、10年以上たった人でも平均3.72であることを考えると、学習困難者の満足度は高い可能性がある。

ただし、これは客観的な指標による比較ではない。学習困難者は中国でも教育機会に恵まれなかったなど、相当の苦勞を積んできた人たちである。自身の人生に対する期待もあまり高く持ち得なくなっている可能性が高い。つまり、多くを望まないが故の満足であると解釈した方が近いと思われる。何人かの人は、気候、環境(特に衛生面)(Bㄗ, Bㄹ)、生活の便利さ(Dㄹ)について日本の暮らしやすさを挙げ、中国ではもう暮らしたくないと語った(後述するFㄹのケースを参照されたい)。

しかし、不満や不安に思うことがないわけではない。領域別に見てみると、訴えが多かったのはまず「生活費」の問題であった(5人)。生活費の問題は今現在のこともあるが、老後の生活の心配に直結している。日本での勤勞年数が短いため、年金の受給額が低すぎる問題は徐々に改善されてはいるが、不安をうち消すに足るものではない。平均年齢が53.7歳と、中国ではすでに「老人」とみなされる年齢にさしかかっている人たちだけに悩みは深い。特にB家では長男が調査日の翌々日、世帯分離して独立することが決まっており、この時点でその後の生活の目処が立っていなかったことが一層問題を深刻にしていた。

「仕事探し」も同根の問題と考えられる。日本語があまりできず、健康状態もよくない人を雇う事業所は多くないし、面接に行くことさえ困難である可能性がある。D家の場合は、自立指導員が、呼び寄せ家族についてもすべて仕事探しを代行していた。職業安定所は就労まで手を貸してくれるわけではないため、指導員本人が求人カードで探した上、面接に立ち会って決めたという。どこまで支援するかは自治体や指導員個人の方針による違いが大きい。

生活保護を申請したいが、役場が受け付けてくれないと訴える世帯もあった。こうした問題については、学習困難者にとって施策に関わる複雑な条件や日本社会の慣例などについての正確な情報を得ることが容易でない場合が多いため、どこかで誤解が生じている可能性がある。しかし、今回は行政側の援護担当者の見

解を聞く機会がなく、詳細は不明である。

表3 不安・不満を感じている生活上の領域

凡例： が不満不安を感じている領域、 は強く感じているもの、×は不満不安を感じていないと明言したもの、 は少し不満があるもの、無記入は言及されなかったもの。計はを0.5人として数えた。

	Aㄗ	Bㄗ	Bㄹ	Cㄗ	Dㄗ	Dㄹ	Fㄹ	Fㄗ	Gㄗ	Gㄹ	計
1.健康問題			×		×	×	×			×	4
2.日本語習得				×			×				4
3.生活費											5.5
4.仕事探し				×							3.5
5.進学											
6.仕事の内容						×		×		×	
7.職場の人間関係						×					
8.家族関係						×					2
9.親族関係		×	×								1
10.友人関係	×				×	×	×				2
11.近所付き合い	×	×	×	×	×		×				
12.家族の呼び寄せ				×			×				1
13.住居		×									4
14.生活上の安全	×		×								2
15.子供の教育			×		×						1
16.自分の教育											
17.子供の結婚・恋愛問題					×	×					
18.自分の恋愛・結婚問題											1
19.生きがいや将来の希望											1
20.将来の生活設計	×										3
21.日本の生活習慣マナー		×			×						2.5
22.余暇娯楽			×				×				
23.その他			×				×				1
生活満足度(5段階)	4	3	3	3	3	3	5	5	無答	5	3.78

Dㄗの「その他」は、二世の帰化が申請から受理されるまで非常に長い時間がかかることへの不満

続いて4人が「健康問題」「日本語習得」「仕事探し」「住居」への不満を挙げた。持病を持つ人が多く「健康問題」も先行き不安と重なってくる。医療費についての生活費問題と重なる悩み(「病院へ行く金がない」)も聞かれたが、これも誤解の可能性もある。

「住居」はF家以外は都道府県営住宅に入居している。不満を訴えたのはこのF

家と、老朽化した県営住宅に住むA7である。F7は健康、職業、人間関係等、何についても「もう少しいい条件が得られればとは思いますが、中国にいたときのことを思えば、それほど現状に不満というわけではない」と言い、帰国者への援護施策の不備について訴える他の帰国者に対しても、否定的な評価をしていた。唯一の不満が、風呂なし2Kに10代後半の息子、20代前半の娘と親子4人で住む今の住居に対するものだった。公営住宅への入居を何度も申請しているが、他県からの転入世帯であるため優先的に入居できる権利が失われており、なかなか抽選に当たらないと言う。

日本語については、次節で詳しく述べる。

2-1-2.情報入手

対象者に「情報」という概念を理解してもらうこと自体がかなり難しかった。(半)非識字者の場合、実際に提供される情報を入手する媒体が限られていることが、より一層概念の理解を困難にしていると考えられる。文字による情報からは縁遠い上に、音声言語による情報であっても日本語では理解が困難である。

そこで、「たとえば、どこの医者に行けばいいかわからないようなときは誰に聞くか」と尋ねると、自立指導員⁹⁾や役場の援護担当者、身元引受人という公的支援者を7人が挙げた。指導員や身元引受人の場合、3年間という担当期間を過ぎていても何かと教えてもらっているというケースがみられた。支援者側にも、期間が過ぎたといってもこの人たちを助けられないわけにはいかないという認識があるのかもしれない。D家の住む県では、期間を過ぎても日本語の困難な帰国者に対しては、指導員が支援を続けることが制度化されているという(指導員談)。

F家は初めての定着地から転出したため、公的支援の枠外に置かれている。F7は医者を探したいときは駅の看板を見てそれを写し、人に聞きながら探し当てると答えた。その程度の漢字なら何とか読めると言う。後述するが、他の人に頼れなかった分、自力で困難を克服していく力量を培い得た稀なケースであるかもしれない。

日本人社会に例外的に参入し得ているG7は、それほど密なネットワークがあるというわけでもないようなながら、基本的な住環境に関する問題への対処などは階下の日本人に相談できる様子だった。また、子どもたちがかなり日本の生活にな

じんでいるので情報に対するアンテナはある。また、本人もテレビなどから社会事情などの情報はとっていた。

2-1-3.日本語、対人ネットワーク

表4 一世世代の日本語の困難度、使用頻度、親密な日本人の有無

	A7	B7	B7	C7	D7	D7	F7	F7	G7	G7	平均
会話困難度	5	5	5	5	4	4	5	5	2	5	4.5
読書困難度	5	5	5	5	5	5	5	5	2	5	4.7
日本語頻度	2	1	1	3	1	1	5	5	5	5	2.9
中国語頻度	3	1	1	5	2	1	2	3	5	1	2.4
親密な日本人の有無	近所	なし	なし	なし	なし	なし	?同僚	?同僚	工場長	近所	0.3

「親しい日本人」の項で「?同僚」となっているのは「親しいというほどではないが」という回答であったことを示す

言語の使用頻度：ほとんど毎日使う：5～週1回程度：3～ほとんど使わない：1 の評定

日本語の困難度

日本語の会話については、「それほど困っていない」というG7一人を除いて全員が「困っている」という。B7は、「来日して5年8ヶ月が経つのに、来日直後と比べても進歩がない」と否定的だ。生鮮食品加工工場に勤めるD7は「慣れた職場だから、いつもの指示ならわかるが、長く話されると何が何だかわからなくなる」。駅構内の清掃業に従事しているF7は、同僚との会話は「簡単なことしか話さないから大丈夫」、彼が中国から来たことさえ知らない同僚もいるという。つまり、職種上、職場で困る場面は少なくてすんでいる。就業していないA7、B7、B7、C7、D7は日本語で話す機会自体、ほとんどないという。

G7は2人とも親しい日本人がいると答えており、仕事を持っていることもあって日本人との接触の機会はこの対象者より多いと言える。その結果であるか、原因であるかは別として、G7自身が日本語の会話を困難に感じている度合いはそう高くない。

では、どの場面で彼らは「大変困っている」と感じるのだろうか。就労していない人たちの場合、日本語を生活の中で使う頻度自体が低い。F7は「日本語を使

って満足にできるのは買い物ぐらい」と言うが、おつりのトラブルでもない限り、Dの言うように「買い物には言葉は不要だ」し、「近隣との交際も決まった挨拶を交わす程度だから、困らない」。日本語を話すという「大変困る」に違いない場面をあえて求めないことで、日々の生活を何とか過ごしてきていると言えるだろう。また、もともと中国での彼らの行動半径も、日本でのそれほどではなくても、他の識字者に比べれば狭かった可能性も否定できない。

唯一、避けられない困難場面が病院での会話である。高齢化しつつある孤児世代には持病のある人が多く、定期的に通院しているD、B、C、Gは医師との会話に困難を感じている。しかし、これもGは日本語のできる息子を通訳として同伴することで回避し得ている。また、D家訪問時に自立指導員と会う機会が得られたのだが、簡単な会話ができるようになった帰国者相手であっても、病院からの要請があるので指導員が通訳として同行しているという。Bは中国語を解する医師のいる病院に通っているという。つまり、どの人も何とかなっている。

彼ら自身は、日本語の習得がなかなか進まなかったことの原因を何においているだろうか。Fは「漢字が読み書きできる人なら、それを元に日本語もできるようになるんだろうが、自分はそれもできないんだから」と言い、Dも「識字程度が低い(中国語で「文化がない」と表現される)から、やっても憶えられない」と言う。文字世界に縁遠い彼らにとって平仮名の学習は一大困難事である。D、A、C、G、B、Fは平仮名が十分に読めないという。しかし、このうちのDは当センター退所時点では平仮名を習得していた。文字を使わない日常の中で忘れていったものと思われる^{*1}。D、Fは「平仮名は何とかなるが、片仮名は読めない」という。語彙を記憶する助けとなる文字が習得されていないことは学習にも大きく響くだろう。

唯一人そう困っていないというGは、調査者の観察と本人の談話から、複雑な話題や長い話は話す方も聞く方も困難があるが、日常的な付き合いや仕事には支障はないようだった。同僚とは雑談もするし、仕事帰りに駅のホームで一緒にビ

ールを飲んだりもしているという。手続きなどは日常会話は問題ない次男に頼っている。

読み書きについてもG以外、全員が「大変困っている」。Gは回覧板の漢字ぐらいは何とか読みとれる識字力を持っている。しかし、読み書きで困っていないというよりは、「読み書きはだめだ」とはなから諦め、能力を超える場面では次男に頼るようにしているらしかった。生活に必要な読みとりは、どの世帯も同居または近所に住む息子や娘に頼ることで何とか切り抜けてきている。「今さら読み書きなんて...」というのが正直なところである。しかし、そうは言いながらもFは平仮名ぐらいはできるようになりたいと言う。Dも「職場で役に立つから」と片仮名に対する学習ニーズを持っていた。それ以上の読み書きに関してはニーズがあったのは、もともと多少漢字の読めるBの「回覧板等の読みとり」「役場や職場で使う書類の読み書き」ただ一人だった。

学習行動に移る意欲

認知されている困難度の大きさは裏腹に、日本語学習に対しては皆消極的である。理由として年齢を挙げる人が多い。D、A(ともに54歳)、C(61歳)は「できるようになりたいかと聞かれれば、そりゃそう思うが、もう年だし、今さら勉強してもねえ...」と異口同音に言う。現代の日本では、50代は学習するにもそれほど年ではないと思われるかもしれないが、もともと教育とは縁遠かった人たちである上に、中国社会では「生涯学習」という価値観は普及していない。女に学問は不要とされた時代に生きた女性たちであることも大きいだろう。また、就業しているF、D、G、Cは忙しくて時間がとれないと言う。また、持病で体調の優れないこと(B、C)も学習に対して消極的にさせているようだった。

Fは自分の不十分な日本語力に対して「それほど問題だと思って」おらず、「聞き取れないときは『すみませんねー、日本語ダメです』と言って切り抜け」ている。この「すみませんねー」は調査者の耳にも非常に自然なイントネーションで発された。彼が耳で拾って使いこなすようになった語彙である。Fは43歳と比較的若く来日し、その後の滞日期間も12年と長いと、他の学習困難者に比べれば習得している語彙もある。実際に困難を感じる度合いも他の人よりは低いかもしれない。それらの語は「何度も聞いて憶えた。書けないからメモはしない。すぐ忘れてしまうのだが、また同僚などに尋ねてそれを繰り返しているうちに憶

*1最近の所沢センターにおける学習困難者への平仮名指導では、非識字者であっても3ヶ月で平仮名のほとんどを習得している人が多い(内藤、1995)

える」方法で身につけたという。

可能性のある支援形態 方法

「さあ勉強しよう」では、敷居が高いと感じてしまう人たちである。しかし、仮に勉強するならどんな形態がいいかとの間に、B7、B4、G7は「大勢でクラスに集まってやる方が楽しい」と答えた。3人とも「家族以外と中国語で話す機会はほとんどない」という環境にあり、そのことが所沢センターで経験したクラス形態を望ましく思わせた可能性がある。教室のこうしたサロンの機能の重要性はつとに指摘されている(川崎市、1997、佐藤他、1997)A7、F4、F7ともに「先生がいて教えてくれる形なら、先生対生徒の数はどんなでも可」と言う。通信教育などの他の形態は経験したこともないため、イメージが湧かないようだった。

しかし、調査対象者の中では最高齢のC7(61歳)は、「たとえ同じ団地の中に日本語教室があっても行かないだろう。先生に迷惑がかかる、年だし憶えられないし」、「教師にそんな自分の学習について気を揉ませるなんて」と言う。支援者が学習者の学習状況を評価し、方法や目標を修正していこうとする行動が、なかなか伸びないことを悩む学習者にとってはかえって心理的な圧迫となってしまうようだ。ただ、C7はたまたま知ったテレビの中国語講座を「これならわかるから」とときどき視聴しており、自宅で気軽に見られるテレビ講座という形態には「それなら見るかもしれない」と答えた。テレビ講座にはG4も興味を示していた。調査者の観察から、こつこつやる一人の自宅学習は向いていなさそうだった。

2-2. 20-30代の二世世代の調査結果

本人の談話以外の調査者の観察およびコメント部分には()を付す。

表5 二世世代の個人的属性

	A1	C1	C2	E1
現在年齢/性別	31男	36男	28男	20男
来日時年齢	29	27	19	16
滞日年数	2	9	9	4
現在の職業	無職	清掃	建築職	下水道工
中国での学歴	小3退	小5退	小6卒	小6卒

二世世代は調査件数が少なく、またそれぞれの個人的な事情の違いも大きいため、個別に本人の談話を中心に構成し、考察を加えることとした。

2-2-1. A1(31歳、男性、滞日2年、小3退、無職)

本人談および観察

小学校3年生のときに事故で失明し、それが原因で学校へ行かなくなった。それでも、中国では、家族で従事していた農業の決まった段取りの簡単な仕事を手伝うなどして、労働にも参加していた。友だちもいた。

しかし、来日後は、(障害のために)外出機会も限られ、家庭外との接触は少ない。親しい日本人もいない。ただし、同じ敷地内の県営住宅に後から来日した姉一家のところへは道のりも憶え、頻繁に出かけていっている。母に付き添われてときどき散歩に行く。自宅にいるときはテレビの歌番組などを聴いている。また、弟が買ってきてくれたダンベルで運動をすることもある。慢性的な胃痛があり、2週間に1回程度、病院に通っている(これが外部との唯一の恒常的な接触機会となっている。)

(日本語については、外部との接触が少ないこと、視覚的な手掛かりが得られないこと、来日時すでに29歳だったこともあって習得は進まず、調査時点での日本語力は母のA7より低い。)日本語は非常に大変だ。市内の日本語教室に3ヶ月ほど在籍したが、胃痛がひどくなり、通院のために教室には行けなくなった。(そう言いながら、日本語習得について不満や不安を持っていないと言う。この問題に関しては可能性のイメージが全く湧いていないようだった。また、周囲の家族も、孤児本人、身元引受人ともどのような方策があり得るのか、特にイメージを持っていないようだった。)

病院の医師や看護婦の指示などは、少しは慣れて聞き取れるようになった。こんな程度で、もういいのかもしれない。近所の日本人と話すチャンスもなくなっているが、そうした日本語を身につけたいという思いが強いわけではない。

このような日本での生活については、満足とも不満とも言い難い。

考察

中国において、識字の度合いと身体障害や慢性疾患を持つ比率の関係についての統計は知られていないが、所沢センターの入所生の中では、幼少時の病気や事

故などが原因で学校に行かなくなった、あるいは初めから行かなかったという人は3%弱である(所沢センター修了生データベースによる)。中国における学齢期の障害児の就学率は上昇したとはいえ、全国で60%(『中国年鑑』、1997)であるが、都市農村間の格差はまだ大きい。

学齢期の子ども全体の就学率は、小学校で98.5%、中学校で78.4%(同上)であり、一世世代の時代に比べて改善されている。しかし、障害児の学習権は健常児に比べて保障されていないと言えるだろう。

A1の場合、本人も周りも日本語学習についてのみならず、日本での生活自体に希望を見いだしていないように見受けられた。慢性の胃痛も遠因はこの閉塞感かもしれない。中国では、生まれ育った土地のコミュニティが機能していて友だちもいたし、やるべき仕事もあったため、今のような閉塞感を感じずに済んでいたものと思われる。彼のようなケースの場合、言語の障壁も高く、本人や家族(の言語障壁も高い)への直接の働きかけだけでは、今の彼の閉じた生活世界を広げていくことは困難だろう。

鍵は近隣コミュニティでのネットワーク形成にあると思われる。しかし、それを促進する要因がもともとその地域コミュニティにあるのか、ないとしたら、どうすれば促進できるのか。これらのことと彼ら一家を含めた帰国者と日本人世帯との日々の接触のありようから考えて、コミュニティ自体を臨床の対象とするコミュニティ心理学的な介入が必要と考える(これについては後述)。また、視覚障害者への支援については、その方面の専門家の意見も必要である。

2-2-2.C1(36歳、男性、滞日9年、小5退、清掃業パート)

本人談および観察

呼吸器系と循環器系の慢性疾患を抱えており、自転車に乗ることもできない。幼少時から4回も手術をしたが、結果ははかばかしくなかった。病気のせいで学校へも行かなくなり、以来ずっと農業に従事していた。

来日後も疾患のため、ずっと通院中。フルタイムの就労は困難で、週4回のパート勤務をしているがこれが精一杯。しかし、役所はそうのように評価してくれない。自分と同じぐらいの病気の日本人には生活保護が出ているのに(差別があると感じている)。

もともと社交的な方ではない。親しいと言える日本人はいないが、日本人の同僚に遊びに誘われても行くつもりはない。金もかかるし。同じ団地内の帰国者ともあまりつきあわない方。しかし、1年に数回ぐらいは一緒に街に遊びに行ったりする。料理が好きで、うちで麻花を作ったり、中華料理の食材をわざわざ遠方まで買いに行ったりすることもある。しかし、仕事するには厨房の仕事はきつすぎるし、きつい割には収入が少ないのでとてもやれない。休みの日は主に自宅で中国映画のビデオをずっと見ているのが好き。

(日本語は文法シラバスで言えば初級半ば程度か、複雑な話は日本語では無理。)複雑な手続きなどは、親族中の日本語のより上手な者に頼っているが、日常生活は自力でこなしている。しかし、日常生活で使う機会がないため、憶えていた平仮名も忘れてしまった(若干自嘲気味だった)。日本語についても生活についても自分のことはもう諦めている。

心配なのは妻の日本語習得。来日して6,7年たつのに、日本語が全然できない。妻とは日本に定着した直後、中国に帰って結婚した。妻は当時17歳。ずっと子育てをして家にいたし、体も悪い。ときどき倒れる。下の子が保育園に行ったらアルバイトぐらいしてくれると自分も楽なんだが...。とにかく経済的には苦しい。弟と比べて収入も少なく、中国の親戚知人からも低く見られる。

今の望みは子ども(保育園児)だ。自分は病気だし、教育も受けてこなかった。子どもには日本でいい生活をさせたい。大学に行きたければ行かせたいし、好きなことをやらせたい。だから、中国へは帰らない。そのためには食べるものも我慢する、子ども優先だ。子どもの世話は大変だがとてもかわいい(長男が保育園で描いた絵が表彰された記事を見せてくれた)。

考察

C1の境遇もA1に近いところがあるが、C1の場合、疾患を抱えて家族を養っていることの困難が行政の福祉担当者に理解されず、生活保護が受けられないことへの不満が強い。「同じような病気を抱えている日本人に生活保護が適用されているのに、自分は働かされている」と、問題は中国人・帰国者差別にあると捉えている。少なくとも、これまで身体障害者と認定されていないため、障害者向けの様々な福祉サービスを受けることはできていない。

本来これは福祉の問題であるが、こうした問題は客観的な事実を把握するのが

難しい。あるいはC1の認知には偏りがあり、誤解が生じているかもしれないし、また、福祉側の彼の病状に対する判断が本人のそれとずれていることはあり得る。しかし、C1側の被差別感や価値観の文化的差異に配慮しながら互いに冷静に話し合うことは容易ではないだろう。

日本語習得という我々の支援領域を超える問題であるが、こうした問題は帰国者の生活の中で常に起こっている大きな問題である。帰国者の日本社会での適応を支援する者として、こうした問題に眼をつぶったままでは支援の有効化につながらない。最低限、福祉制度上の問題や心理臨床の専門家とのネットワークが必須となる。今後の大きな課題である。

2-2-3. C2(28歳、男性、滞日9年、小6卒、建築職人)

本人談および観察

来日時19歳だったが、小卒の学歴と日本語力が考慮されてか、地元の中学校2年生に編入された。しかし、日本語も学力も到底追いつけるはずがなく、2か月で中退している。その後、帰国者対象に開かれている日本語教室に編入を申し入れたが、自分から中学を辞めたことをもって権利を放棄したと見なされ、編入を認められなかった。辞めたのは中学の勉強についていけなかったからで、勉強をしたくなかったからではない。中学での学習の機会も与えられていない(このことに関しては今でも不満に思っている様子)。しかたがないので、民間の日本語学校にも自費で3か月ほど通ってみたが、思うような成果は得られなかった。

その後、まず友人の紹介で染色工場に就職した。4年勤めてやめ、現在の仕事は新聞広告で見つけた。最初はアルバイトで始め、まあいけるかなと思って正社員になった。仕事は朝6時から夕方6時まで。悪天候のときは休みになる。仕事中の姿勢のせいで少し腰痛があるが、まあ大丈夫。

社長を含め4人程度の小規模な会社で人間関係もいい。よく一緒に飲みにも行く。飲みに行けば99%は社長のおごり。社長は38歳と若く、C2の方から誘っておごらせることもある。しかし、「親しい」間柄とは考えていない(何をもち親しいとみなすかについての中国と日本との文化差が影響している可能性がある)。

今の生活には不満であるとも満足しているとも言えないが、今よりも生活水準を向上させたいと思っている。来年から、専門職人の資格を取るための研修に、

休日に会社から派遣されて行くことになっており、そのチャンスは得られたと考えている。2年で2級、4年で1級がとれる。不満といえば、妻も日本語の勉強を出産のために3-4ヶ月でうち切らざるを得なかったのだが、出産後、まだ残っているはずの研修期間を認められなかった。このことについても不満がある。

日本に定着してすぐに働き始めたため、運転免許をまだとっていない。取りたいと思っている。また、現在日本国籍の申請中。5月頃に許可される見込み。

(日本語の会話力は文法シラバスで言えば初級終了程度か。日常生活には問題がなさそうである。)後から呼び寄せた姉たちの手続きなども自分が行った。読み書き以外なら大抵の事は大丈夫。

(しかし、話をしているうちに)でも、本当は日本人と同じぐらい話せるようになりたいと思っている。自分の日本語が変なのは自分でわかっている。今でも、教室があれば通う意志はあるが、この定着地にはそういう教室がない(と帰国者間の情報網の範囲で思っている)し、そもそも毎日残業で終業時間が不規則であるため、実行は容易ではない。勉強するとしたら、クラス形態がいい。(調査者が市内にあると知っていた夜間中学に言及すると)そういう学校があるとは初めて聞いた。冬なら残業も減るから通えるかもしれない(通うのは難しいと言いながらも気持ちが揺れている様子だった)。

考察

C2は周りの環境に積極的に働きかけていく人で、また、いわゆる任侠肌タイプである。職人の世界はもともと水が合っていたのかもしれないが、上司からも認められている。また、経済的な余裕も比較的得られていることで、今回の調査事例の中では、最も将来に対する展望を持ち得ている。

しかし、日本語については、日常的な会話はほとんど問題がなくなった今も不安全感につきまとわれていた。その不安全感があるからこそ、来日当初に日本語学習の機会が十分に得られなかったことを今でも不満に思っているのだろうと思われる。自費で民間の日本語学校に通うほど学習意欲があったにも関わらず、思うような効果が上がらなかったのは、おそらく留学生や就学生対象の日本語学校の授

業が彼の学習スタイルに合わなかったからではないだろうか。今、一家を支えていかなければならない彼には日本語教室に通っている余裕はなさそうである。しかし、動機付けが強い分、気持ちが揺れているようでもあった。

実は、日本語学習の機会が得られなかったことに対しては、担当部署に不満を訴えに行き、怒りをぶつけて口論になったという。「こちらには権利があるのだから、そう言えば通るはず、通らないのはおかしい」と言うが、理路整然と訴えるようなやり方は馴染まないようだった。しかし、今後も行政側なり福祉側なりに対して主張する必要が起ることはあり得るし、これは訓練で身に付くスキルである。このことも念頭にあって、調査者は夜間中学を勧めたのだが、実際問題として毎日の通学は週1-2回の日本語教室よりもさらに困難らしかった。^{*1}

2-2-4.E1(20歳、男性、滞日4年、小6卒、下水道工事)

本人談および観察

来日時16歳。定着地の日本語教室はレベルにも授業方法にもついていけず、1ヶ月でやめて就職した。(中)学校で勉強するのはあまり好きじゃないので、学校に行こうとは思わなかったが、日本語はできないと困るから、日本語教室には行きたい。しかし、やめた教室にしる、平日の昼間にしか開いておらず、仕事のある者には通えない。同市内には他にも帰国者が20人ほどいるので、皆で夜間か休日の教室開催を請願に行ったが、梨の磔。

今の仕事はきついわりに給料が少なくて、不満。もう少し楽な仕事があれば変わりたいと思ってはいるが…。(転業を考えてもいるが、積極的に動いてはいない様子。もともと無口な方で不満を表出することをあまりしないが、ふと「(中国に)帰っちゃおかな」と漏らした。相当の不満を抱いていることが感じられた。)

親しい日本人もいない。以前は、職場に厳しいがよく面倒をみてくれる先輩がいたのだが、その人もやめてしまった。職人の世界だから、教えてはくれないが、

*1市内の夜間中学校に入学時期や資格について問い合わせを行い(彼の場合、忙しくて無理だろうと本人も発言していたため、将来のいつか有効な情報となるかもしれないからという前置きをして)、その情報を電話および文書で伝えた。同時に市内のボランティアによる無料の日本語教室についての情報も文書で伝えた。

厳しい方が早く憶えるからいい。同じ帰国者の子たちとのつきあいはないわけではない。今は中国の同郷の女の子と将来の約束をしている。

つきあいもあまりないので、街にも出ない。車は持っているが、通勤と買い物、生活のために使うだけ。(車で10分ほどの)駅前に来るのも何ヶ月かぶり。ファーストフード店などもほとんど利用しない。楽しみは音楽を聞くことで、香港の張学友、BEYOND、周慧敏なんかが好き。日本の歌手では(ちょうど店内のBGMでかかっていた)この人(高橋真梨子)の歌が好き。ギターが弾けるようになっていいなと思って(中国語の)教則本とかも読んでみたが、よくわからなくてそのままになっている。

こうした生活については、満足とも不満とも言い難い。心配なのは(やはり学習困難者である)両親の健康。父が前年に交通事故に遭い、後遺症があること、母が眼病で失明の恐れがあること。

日本語については、周りに頼れる親戚もなかったことから、(自分自身の識字力も高くないが)より困難な両親に代わって手続き等を引き受けてきた。(調査者の観察では、日本語の会話力は文法シラバスで言えば初級終了程度か、C2同様、若くして来日したためか、日常的な会話には問題がないし、発音や間合いの取り方も自然で滑らかである。)今でも、職場でいつもと違うことを言われたら分からないし、意思の疎通上のトラブルが生じることもある。しかし、言ってもわかってもらえないときは、黙って次の日休んでしまう。

日本語を勉強するとしたら、黒板を前にしてやるのは嫌いだから、グループ指導か1対1がいい。どちらにしても、1人で自習は自分には無理。

考察

E1は「言ってもわかってもらえないときは、黙って次の日休んでしまう」という発言に代表されるように、積極的に環境に働きかけていくタイプではない。現在の職種に対する不満もあるが、それを表だって訴えたり、転職や他地域への転出という形で問題解決を考えたりしているわけではない。いざとなったら「黙って休む」あるいは「(中国に)帰っちゃう」というような、自分が身を引く形が彼の手持ちのカードであるようだった。

その後の電話インタビューで、調査の半年後に、前から交際していた中国の同郷の女性と結婚して日本に呼び寄せたという。日本では20歳での結婚はかなり早

いのだが、成人すれば早く一家を成し、多くの子を産み育てていくことを重要とする中国の伝統的な価値観に則った展開でもあろう。あるいは現在の面白くない生活を、ライフステージを一段上ることで変えようとする意志も働いたかもしれない。いずれにせよ、今後しばらくは、やがて生まれてくるだろう子どもを含めた家族の生活を支えていくことが最優先となって、調査者が訪問した当時のさまざまな問題は棚上げされると予測される。

今の日本社会では、たとえば「適齢期」という語が現状にそぐわなくなってきたなど、ライフスパンの規範性はかなり薄れてきており、青年はまず自身の個人としての自己実現を優先する考えが一般的だろう。しかし、帰国者の大部分(特に農村出身者の場合)にとっては、こうした人生や家族に対する伝統的な価値観(たとえば、末子が年老いた両親の面倒を見るという中国的な価値観)は深く内面に根づいており、来日後もそれに沿った人生の選択をしていくことが多い。支援に当たる我々もそのことを踏まえてかからないと、効果的な支援とならないで終わってしまうおそれがある^{*1}。

同時に、日本社会の現状や、現在望ましいとされている価値観も踏まえ、彼らがそのときどきのライフステージで求めうる支援を、情報不足から得られないということのないように配慮することも必要である。これにはライフスパンを視野に入れた長期的な支援の発想が不可欠である。

2-2-5. 4人の事例から

ここで、4人だけの事例から二世青年の学習困難者に関する問題を概括してしまうことは避けなければならないが、4人に共通の問題を問題として抽出しておくことは無意味ではないと考える。

表6に「生活満足度と不満・不安な領域」結果を示した。4人ともが本人または家族の健康状態への不安を訴えている。2人は本人が疾患や障害を抱えている。建築職人であるC2は業務の危険と疲労度が高く、生活上の安全とともに健康への

*1帰国者の間では面倒をみるという名目で来日した二世が両親を置いて都会に出ていってしまい、帰ってこないという逆の問題が起こりつつある。世代間の価値観の衝突の問題である。

不安を訴えた。E1は両親の病気への不安である。

また、日本語の習得についても3人は満足していない。満足度は自己の目標とするレベルをどこに置くかにかかっているが、このうちC1は調査者の観察からも、サバイバルレベルで困難を感じるレベルである。C2とE2はそのレベルは脱しているが、より円滑なコミュニケーションができるレベルを目指しており、学習への意欲を持っている。日本語について困難と感じる度合い(表7)は、A1以外は「やや困難を感じる」レベルであり、一世代のほとんどが「大変困難」であったことと比べるとさすがに度合いは低い。

しかし、彼らの日本語学習で、まず問題になるのは時間的な余裕のなさである。C2とE2は毎日のように残業で帰宅が遅く、週に1日の休みの日には疲れ切っていて、勉強しようという気持ちを起こすことが難しい。このため、結果として現状に甘んじてしまうという「諦め」事態が生じている。

「諦め」している度合いは、来日時の年齢が高い人の方がより高い傾向にある可能性がある。C1は本人自身が「もう諦めている」と口にしており、A1の場合は、初めから希望を持っていないためか、諦めるという段階さえ通っていないように思われた。サバイバルレベルで困難であり、本人もそう認知しているにも関わらず、不満を抱いていないというA1の諦めの問題は根が深い。本人および周囲の家族、公的支援者への啓発は有効だろうか。しかし、日本で彼が自己実現を果たすことがあまりにも困難で、かつ中国には生きられる途がなお残されているのであれば、中国に帰国することも選択肢の一つとしてあり得るだろう。(C1の場合は、逆に今さらおめおめと中国には帰れないような立場にあるようだった。)

「親しい日本人」も4人とも「いない」と答えている。C2の事例の項でも触れたように、「親しさ」の規範に文化差が存在することも影響しているだろう。しかし、それ以前に、C2以外は、他の二世青年に比べて同世代の日本人との接触の機会自体あまりない生活を送っている。本人が「親しい」と認める日本人が身近にいれば、その人との交際を通して日本語の習得もある程度は進むのだろうが、そのきっかけも少ない環境にある。

そして、このような生活への全体的な満足度については、4人とも「どちらとも言えない」と答えている。一世代の平均値3.7と比べると低い。このことは、一世代のように諦めてしまっているのではないことの現れではあろう。しかし、

C1を除き、抱えている様々な問題に対して積極的に解決策を取ろうとはしていない。同年代の他の二世青年と比べると、諦めている度合いは高いと言えるのではないか。

表6 生活満足度と不満・不安な領域(二世世代)

表中の はやや不満としたもの、×はそれは不満ではないと明言したか、もともとその問題が客観的に存在しないもの

	A1	C1	C2	E1	計
1.健康問題					4
2.日本語習得					2.5
3.生活費					2
4.仕事探し					0.5
5.進学				×	
6.仕事の内容					1
7.職場の人間関係		×	×		1
8.家族関係				×	
9.親族関係				×	
10.友人関係				×	
11.近所付き合い				×	
12.家族の呼び寄せ		×	×	×	
13.住居					1
14.生活上の安全					2
15.子供の教育					
16.自分の教育					
17.子供の結婚や恋愛問題					
18.自分の恋愛や結婚問題					1
19.生きがいや将来の希望					0.5
20.将来の生活設計					2
21.日本の生活習慣やマナー			×		
22.余暇娯楽					0.5
23.その他					1
生活満足度(5段階)	3	3	3	3	

C1の「日本語習得」の不満は妻の日本語、「その他」は「中国人・帰国者差別」について。

表7 二世世代の日本語困難度、親密な日本人の有無

	A1	C1	C2	E1
会話困難度	5	4	4	4

読書困難度	5	4	4	4
日本語頻度	1	5	5	5
中国語頻度	3	5	5	5
親密な日本人の有無	なし	なし	なし	なし

3. 結論と今後の課題

3-1. 一世世代

a コミュニケーションの機会の必要

人は生活の中のかなりの部分をコミュニケーションに費やす動物であるが、一世の学習困難者の場合、その**コミュニケーションの機会**が少なくなりがちである。就業していない人では日本語との接触が非常に限られるし、就業したとしても言葉あまり必要としない職種にしか就けない場合が多い。近隣に帰国者がいなかったり身体が悪くて出歩けなかったりすると、家族以外との中国語でのコミュニケーション機会もなくなる。

家族内でも、すでに兆しのみえている問題として、家族内の二世三世とのコミュニケーションの問題が挙げられる。日本で生まれ育った三世はもちろん、年少で来日した二世の場合、幼稚園や学校での生活を通して第一言語が日本語となっていくことが多い。F家では19歳の長男(来日時8歳)には中国語で話しかけても通じない場合が多いという。G家は「22歳の次男(同14歳)は複雑な話は中国語ではもうできない」と言う。また、価値観の違いや生活時間の余裕のなさから、孫が祖父母とゆっくり時間を過ごすことは特に孫が学齢に達して後は望みにくくなる。

これらのことから、彼らが望むようなコミュニケーションの機会を作る配慮がなされないと、一世は孤立化する恐れがある。帰国者と接する機会はもちろん必須だが、日本人と交流する機会も彼ら自身、求めている(Da, Ba, A7)。その場を日本語学習の機会とあえて捉える必要はない。「日本語の勉強」と言ったのでは彼らもかえって来にくくなるだろう。中国語のある程度話せる日本人との交流であれば、プレッシャーが少なくすむのではないだろうか。そして、その場を何

か一つでも趣味的なことを始めてみるような機会にできないだろうか。学習困難者には、生活に追われる中で趣味など持ったこともない人が多いが、何か楽しみを見つける途を探れないだろうか。

しかし、多くの一世代の場合、このようなコミュニケーションの機会を持つことに対して本人が諦めてしまっており、よほどの働きかけをしないと、サービスを提供しても実際には活用されないで終わるおそれが高い。中には交通手段を利用することに対してすら「敷居が高い」と感じる人もいる。何とか家の外へ彼らが出てきてくれるようにすることすら難しい場合もあるのだ。一世世代の高齢化につれて、健康面での問題もあり、この状況はますます深刻になる。これについては下のdを参照。

b 家族を単位とした支援の必要

また、今回の調査結果の中では、それぞれの事例が抱えている問題をその一家全体の問題として考えるべきものが多かった。たとえば、視覚障害者である二世が外に出ていくことを促す環境が家庭内にもないこと(A家)、生活保護費との関係で二世が世帯分離して独立せざるを得ない場合が起こるが、そのことが生活のあらゆる領域で二世に頼っている一世世帯を不安に陥れること(B家)、さらに、この問題が起きる背景として一世がすべてを二世に頼っているということ自体の持つ問題、また、上で述べた、閉じこもりがちな一世にコミュニケーションの機会を確保する困難など。

これらの問題については、本人だけを対象にした情報提供・カウンセリングや、支援者へのコンサルテーションを行うだけでは不十分である。家族の中での本人の位置づけ、成員間の関係も視野に入れた上で、家族を含む周囲の人たちに働きかける支援でないと、結局有効ではないだろう。もちろん、これは学習困難者に限られないが、学習困難者の場合、自力で情報を入手し、新しい事柄を学習することがより困難であるため、支援者の役割もより大きくなると考えられる。

c 「学習」の可能性

現在まだ40代前半の人の場合、「学習」も可能性が残されている。

今回の調査結果で言えば、F1は非識字者であるが、43歳と比較的若く来日し、その後の滞日期間も12年と長いため、他の学習困難者に比べれば習得している語彙も多い。それらの語彙は「何度も聞いて憶えた。メモができないからすぐ忘れてしまうが、また同僚などに尋ねてそれを繰り返しているうちに憶える」方法で身につけたという。周りの環境に対してかなり積極的に働きかける方法であり、誰もができる方法ではないが、こういう可能性もあることを彼らに示唆する価値はあるだろう。

また、年齢に関わらず漠然とした「勉強はしたい」という気持ちも持っている人はいるが、学習の効率化のための方策(マンツーマン支援など)がかえって心理的な負担となるおそれがあることが調査結果から示唆された。そこで、学習したいという人に対しても、緩いコミュニケーションの機会を作るやり方が、支援する方も学習する方も互いに継続がしやすいかもしれない。他の手段としては、気楽に視聴できるテレビ講座番組が開発されれば、比較的高齢の人でも可能性がある。

d コミュニティ心理学的アプローチの必要

これらの問題を抱えた帰国者家族への支援に際して考慮すべきは、援護施策の自治体による違いや、ボランティア活動に携わる人的リソース、ボランティア活動であると意識されずに日々行われている地域社会の非公的なサポートシステムの地域による違いである。これらを無視して有効な支援は不可能だろう。

支援にあたる者には地元の事情に通暁した者が必要となる。理想を言えば、その支援者と、高齢者福祉/医療や異文化間カウンセリングなど関連諸領域の専門家や、民生委員、自立指導員などの公的支援者、近隣で支援に積極的な非公的支援者などがネットワークを作りながら、試行していくべきだろう。これは実施はそう容易ではないが、個人ではなくコミュニティそのものを臨床の対象とするコミュニティ心理学の分野では、すでにこのようなアプローチで実践的な研究が重ねられている。その発想に学ぶものは多いと思われる。

3-2.二世世代への支援

働き盛りの二世は、日本での人生に対しても積極的な態度を持っていることが多い。しかし、その日本語力と学歴では就ける職種が限られ、あるいは現在の職

種の中でのキャリアアップが容易でなく、職業上の自己実現の可能性が閉ざされがちである。

a：日本語学習については、地域にもよるが、C2やE1にみられるように、彼らのその積極性を受け止められる場がないことが多い。これには、学習困難者への支援の技術や知識がまだ蓄積あるいは流通していないことが大きい。特に、働きながら生活の中で日本語を習得するには、自学の技術を持っていることが要となるが、この方面を支援するノウハウの蓄積と流通はさらに遅れている。支援者間のネットワーキングが待たれる。

b：社会生活や世界観の拡張に必要な**基礎学力の保障**、および

c：最低限の**学歴取得の保障**の問題については平城(1997)に詳しい。なお、日本の小中学校に編入した二世三世や、帰国者以外の外国人の子供の場合も、適切な指導が受けられず、卒業はしたが読み書き言語を一つも習得できない事態がすでに生じている(総務庁、1996)。学校教育の支援枠から漏れてしまったまま社会人となっていく彼らへの生活の中での学習支援システム開発は急務である。

すでに家庭を持ち、一家の柱として働いている二世の場合、今の生活基盤を捨てて事を起こすことは難しい。また、年齢とともに本人も「今さら…」と諦めがちである。支援者は、そのときどきのライフステージや家庭の状況に応じた学習の手段があるという情報と、具体的な手段についての情報を提供できることが肝腎だろう。

d：特に、A1やC1のように障害や慢性疾患がある場合、早くから人生を諦めてしまいがちだ。**障害者の学習権**とその具体的な手段についての情報を提供する必要がある。周りの公的・非公的支援者に対する啓発活動が必要になるかもしれない。この問題も、一世世代のdで述べたように、コミュニティ自体への働きかけが必要となる領域である。

いずれの領域についても、まずは情報提供が手をつけやすいサービスだろう。しかし、これは何かと諦めてしまいがちな彼らのニーズを掘り起こしながら行わなければならない場合が多いと予想される。したがって、通り一遍の情報提供ではなく、カウンセリング的なアプローチが必要となるだろう。一回限りでは効果が上がりにくいことが予想されるので、いつでもふと門を叩けるような常設の相談機関があることが望ましい。

なお、今回の対象者の特に二世に対しては、調査後、学習機会などに関する情報提供を行った。彼らの反応を待って継続した支援を行い、支援技術と提供できる情報を蓄積していきたい。

《参考・引用文献》

江畑敬介・曾文星・箕口雅博編著(1996)『移住と適応...中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究』、日本評論社。

岡本包治(1992)『現代生涯学習全集4 生涯学習プログラムの開発』ぎょうせい

川崎市地域日本語教育推進委員会(1997)『共生のまちづくりをめざす日本語学習のあり方 - 川崎市地域日本語教育推進事業報告書 - 』。

国際日本語普及協会(1994)『海外から嫁いだ外国人配偶者の日本語指導に関する調査研究』、国際日本語普及協会。

国際日本語普及協会(1997a)『在日外国人定住者に対する日本語教育のシラバス作成のための調査研究』、国際日本語普及協会。

国際日本語普及協会(1997b)『日本人と結婚した在日外国人女性に対する支援推進のための調査研究』、国際日本語普及協会。

児玉周子、内藤臨(1995)「非識字者を含むセンター修了生家庭への訪問調査報告」、『中国帰国者定着促進センター紀要』第3号。

再研修カリキュラム委員会(1996)『再研修カリキュラム委員会報告書 - 再研修を実施する際の、参考として - 』、厚生省社会・援護局。

佐藤守・稲生類吾(1989)「学習関心の把握」、生涯学習講座5『生涯学習促進の方法』第一法規。

佐藤恵美子・馬場尚子・池上摩希子・小林悦夫(1997)「「再研修」および「再研修」カリキュラム設計についての考え方 - 成人教育の特性をふまえた長期的学習支援の可能性 - 」、『中国帰国者定着促進センター紀要』第5号。

続有恒、村上英治(1974)『心理学研究法 11 面接』、東京大学出版会。

内藤臨(1995)「実践報告 - 非識字者への平仮名指導」、当センター紀要 第3号。

中国研究所(1997)『中国年鑑』、新評論。

平城真規子(1997)「義務教育未修了二世三世の学習権と学歴資格の保障に向けての課題」、当センター紀要 第5号。

安場淳、馬場尚子、平城真規子(1997)「「定住している中国帰国者の日本語学習ニーズ等」についての調査報告 - その1」、当センター紀要 第5号。

山本和郎編(1985)『講座 生活とストレスを考える2 生活環境とストレス』、垣内出版。

山本和郎、原裕視、箕口雅博、久田満編(1995)『臨床・コミュニティ心理学 臨床心理学的地域援助の基礎知識』、ミネルヴァ書房。